

宇治の文学碑を訪ねる [紙上講演会 2021in 宇治 Part2]

小西 亘 先生

【はじめに】

宇治市芸術文化協会様より「芸文協だより」寄稿のご依頼を賜りました。得がたい機会を頂きましたことを感謝申し上げます。木津川市在住の小西と申します。京都府立高校を3年前に退職し、現在再任用の国語教員として、府立南陽高校に勤務しております。勤務の傍ら、京都府南部の南山城地方の文学の蒐集と調査を趣味としてきました。



宇治については、文学碑をしらべた『宇治の文学碑を歩く』(濤標)を上梓致しました。この度はそのなかから、いくつかの宇治に建つ文学碑を訪ねてみたいと思います。

※著作には「注釈青谷絶賞」「月ヶ瀬と齋藤拙堂」「青谷梅林文学散歩」「相楽歴史散歩」「宇治の文学碑を歩く」(2019)「詩歌とめぐる南山城・月ヶ瀬」(2021)

① もののふの 八十宇治川の 網代木に いざよふ波の 行方しらずも

宇治川の中州塔ノ島に建つ『万葉集』柿本人麻呂の歌碑です。歌は、歌聖と呼ばれた人麻呂の、代表作としても知られる作です。詞書に、近江から大和へ向かう途中に宇治川のほとりで詠んだと記されています。

「いざよふ」は「ためらう」の意。

※(もののふの八十) 宇治川の網代木にしばらくとどまる波(それはやがて流れ去るが)、その波はどこへゆくのか、行方もわからないことだなあ

宇治の川波が、網代木にしばしたためらうのを見つめての、詠嘆を詠んだ歌です。この歌は江戸期以来、無常観を表したという説と、実景を描写したのだという説とに、解釈が分かれてきました。それだけ味わいの深い、広がりのある歌であるのでしょうか。網代は冬に氷魚を捕るしかけで、宇治の景物として、すでに万葉の昔から歌に詠まれています。



文学碑の所在地を番号で示しました。
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧